



特集

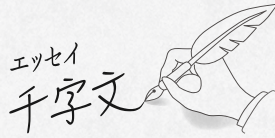
## インド洋の港町や居留地、 内と外

旧市街と新市街、あるいは連続と不連続のはざままで 鈴木 英明

ハドラマウトの玄関口、ムカッター 新井 和広

新旧征服地の違いからゴアの独自性を見る 松川 恭子

モザンビーク島の今昔、バイロから語る 松井 梓



# ハタとパタンク

おかもと ひし  
岡本 仁

一度だけインドに行ったことがある。若いころから冒険的な旅に関心がない自分なので、このときもまた雑誌の取材であり、インドの布地とインドの女性たちの手仕事でもって洋服をつくっている、アメリカ人デザイナーに同行したのだ。だから、かなり限定的な部分しか見ておらず、いろいろな意味で護られており、インドの素顔に触れたとは言いがたい。その町を歩いていて、塀沿いに横に長くわたされた白い糸の束の横を往復する男をよく見かけた。近くで観察したわけではないが、男は手袋をしていて、それで糸をこすると、白い糸が少しピンクがかっていったような記憶がある。

グランドのバンドであるコーナーショップが、インド人の女性バブリー・カウルをフィーチャーした『Tokyo』という曲のプロモーションビデオをYouTubeで観た。驚いたのはそのビデオの冒頭に、まさに記憶の中の白い糸をピンクにする男たちが映るのだ。映像には扇揚げに夢中になって空を見上げる人たちもたくさん収められている。たぶんあの糸は風糸なのではないだろうか、そのときに思った。

そんなことも忘れてしまったところに、今度は別の雑誌の取材で長崎に行った。長崎を気ままに歩き、その印象を書くというような紀行文を依頼されたのだ。友人が教えてくれた長崎の菱形をした風のデザインが面白く、それについて調べてみたいと思つて、風頭山にある「小川ハタ店」を訪ねた。ちなみに長崎では風は「たこ」ではなく「ハタ」と呼ぶ。長崎のハタはインドネシアから伝わったものだと思う。ただ揚げるのではなく、糸を切り合う競技として楽しまれてきた。風の糸は、強くするために麻糸にガラスの粉を擦りつけて強化してある。それをビードロヨマと言らしい。

プロフィール  
1954年北海道生まれ。マガジンハウスにて『BRUTUS』『Relax』『ku:nel』などの雑誌編集に携わった後、ランドスケーププロダクツに転職。おもな著書に『今日の買い物』（共著、講談社）、『ぼくの鹿児島案内。』（ランドスケーププロダクツ）、『果てしない本の話』（本の雑誌社）、『また旅。』（京阪神エルマガジン社）など。2023年2月に初の写真集『HERE TODAY』（芸術新聞社）が刊行されたばかり。

## 目次

- 1 エッセイ 千字文  
ハタとパタンク  
岡本 仁

### 特集

## インド洋の港町や居留地、内と外

- 2 旧市街と新市街、  
あるいは連続と不連続のはざま  
鈴木 英明
- 4 ハドドラマウトの玄関口、ムカッター  
新井 和広
- 6 新旧征服地の違いから  
ゴアの独自性を見る  
松川 恭子
- 8 モザンビーク島の今昔、  
パイロから語る  
松井 梓
- 10 みんぱく回遊  
山村の畑に  
「勝手に生えた」作物  
川上 香
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド  
受け入れてもらえない供物  
——遺跡でバガブをおこなう  
松本 雄一
- 16 コレクションあれこれ  
一枚の写真から広がる協働  
南 真木人
- 18 シネ倶楽部 M  
近代の視点  
——「島の医者」  
諸 昭喜
- 20 ことばの迷い道  
四つ辻  
菊谷 竜太
- 21 編集後記・次号の予告

### 表紙

ムカッターの市街地、市民の憩いの場となっている入江  
(撮影:新井和広、イエメン、ハドドラマウト、2006年)

特集

# インド洋の港町や居留地、内と外

新市街と旧市街——町のなかに隣り合うふたつの街区は、ともに歴史を刻んできた。しかしわたしたちは旧市街ばかりに目を向け、新市街を見過ごしてはいないだろうか。この特集ではインド洋を舞台に、ふたつの街区を橋渡す視点から港町・居留地という空間を眺めたい。

旧市街と新市街、  
あるいは連続と不連続のはざままで

鈴木 英明

民博グローバル現象研究部

ザンジバル島のストーン・タウンやサウジアラビアのジッダなどインド洋の港町や居留地では、歴史を感じさせる建物や街並みなどにあふれる街区に出くわすことが多々ある。現在では観光化の進みも顕著で、レストランやホテル、土産物屋が立ち並んでいるところも少なくない。しかし、それらだけに委ねられない、どことなく互いに似ている雰囲気があるような街区にはあって、しかし、ほかのどことも同じではないと思わせる不思議な空間である。そんな不思議さにちよっとのぼせたりして、街区をふらふら、道に迷っているのにも気づかず、雑踏のなかにまぎれこんで歩いていると、ふと、いつの間にか街並みがまったく異なっているのに気がつくされることがままある。新たに出てきた街並みはそれまでとは逆に、急に道が狭く、入り組み、建物もそれまでの立派さがなくなったり、一軒一軒が小さくなったり、あるいはその逆だったり。何かとそのギャップに驚かされる。何となく、雰囲気すら違う。のんびりすることが時間的に許されない旅行者ならば、そのギャップに気がついたら後戻りしてしまうのが当然なのかもしれない。

## 切り離せない内と外

港町や居留地の歴史を感じさせる街区、それは歴史的地区とよばれることもある。旧市街とよばれることもある。先の事例のほかにも、例えばインド亜大陸や東南アジア島嶼部には英仏蘭などの東インド会社が拠点をついた港町が多くあり、現存する港町のいくつかにも旧市街の存在を認めることができる。それらはかつて壁で囲われたり、川がその周囲をとったり、内と外とが明確に区分される空間であった。しかし、雑踏に身を委ねればいつの間にか旧市街の外に出てしまふように、かつての内と外との境界線は少なくとも、こんにち、わたしたちが訪ねる際には行く手を阻むものではない。港町や居留地に生きる人びとは毎日、かつての境界線を気にせず往來して、日々の生活を営んでいる。とはいえ、いつの間にか境界を越えても、どこかで内と外の違いに気がつくように、何か違っている。この連

## 港町や居留地をめぐる旅

ところで、人間文化研究機構では昨年度からあらたにグローバル地域研究推進事業が始まった。このプロジェクトは大きく四つにわかれ、そのひとつが環インド洋地域研究である。この環インド洋地域研究もまた四つの拠点にわかれ、そのうちのひとつが民博拠点となる。この拠点では、とりわけ、ヒトやモノの流れに焦点を合わせて、環インド洋地域をグローバルな規模で考えていくこととしている。今回の特集はこれに関連して、通常、注目が集まりがちな旧市街ではなく、そのすぐ外側に広がる空間も含めて港町や居留地を眺めてみようとするものである。このイントロダ

クション以下、民博拠点に参加されている三人の研究者にそれぞれ、アラビア半島西部のムカッラー、インド亜大陸西岸のゴア、アフリカ大陸のすぐ沖合にあるモザンビーク島について、それぞれの豊富なフィールド体験を軸に、人類学や歴史学の観点から書いていただいた。今回取り上げた舞台に足を踏み入れたことのある読者も、踏み入れたことのない読者もいるだろう。どっちでも構わない。さあ、連続性と不連続性の混ざり合った港町や居留地の世界に繰り出して見ないか。



ジッダの旧市街を囲む門のひとつシャリーフ門の外側(上)と内側(下)の街並みの違い (サウジアラビア、2023年)



ザンジバル島ストーン・タウンの街並み (タンザニア、2007年)



マトラフの街並み(オマーン、2009年)

# ハドラマウトの玄関口、ムカッラー

あらい かずひろ  
新井 和広

慶應義塾大学教授

アラビア半島南部、インド洋に面したムカッラーはイエメン共和国ハドラマウト県最大の都市であり、県都でもある。歴史的にはムカッラーの東に位置するシフルの方が港として有名だが、近代以降はムカッラーがハドラマウトの玄関口として機能してきた。その理由のひとつは、一九世紀中ごろから二〇世紀中ごろまでハドラマウト沿岸部を統治していたクアイティー王国のスルターンが一九一五年以降ここに居を定めたことである。二〇世紀前半にハドラマウト内陸部の探検・調査を目指したヨーロッパ人、例えばフレヤ・スタークやファン・デル・ミューレンもムカッラーに上陸している。もともとシフルもムカッラーも水深はそれほど深くなく、アデンほどの良港ではない。わたしが一九九六年に初めてこの町を訪れた際にもっとも印象に残っているのは沖合で船が座礁していたことである。

## 海との距離

ムカッラーの市街地のうちもっとも古いのはインド洋に対して南向きにせり出した半島部（旧市街）で、その付け根には大きな墓地（ヤアクーブ墓地）がある。この墓地の真ん中には聖者ヤアクーブ（一一五八〜一一五九年没）の廟があり、町の

シンボルのひとつとなっている。この廟は二〇一五〜二〇一六年にアラビア半島のアル・カーイダがムカッラーを占領したときに爆破されているが、その後人びとの努力により再建された。墓地のまわりにはモスク、住宅、商業施設が密集していて、遠くから見ると海に突き出た街を形成していることがわかる。もともと半島とはいっても幅三〇〇メートル、長さ四〇〇メートル程度のもので、ゆっくり歩いても二〇分もあれば一周できてしまう。古い住宅のなかにはインド洋沿岸の他地域と共通の特徴をもっているものもあり、過去における人びとのつながりを感じることができ

る。半島部の西側にはクアイティー王国時代に発展した街区が形成されていて、その西端にはスルターンの宮殿がある（現在は博物館）。この地区は山が海の手前まで迫っており、建物は山裾から海までの狭い空間に密集している。その地区の目抜き通りは東西に伸び、両側には石造りの建物が並んでいる。むかしはこの目抜き通りより海側には道がなく、通りの南側にある建物はそのまま海に面していた。外から眺めると海から直接建物が突き出しているような風景が広がっていて、ムカッラーの見どころのひとつとなっていた。し

かしその後、海岸線に沿って広い道路が建設された。現在ではさらに埋め立てが進み、以前の街と海のあいだには先述の広い道路のほか、細長い駐車場、人びとの散歩道も兼ねた護岸が作られている。以前は海に面していたスルターンの宮殿も埋め立てが進んだ結果、街中の少し豪華な歴史的建造物となってしまった。半島部もむかしは中東特有の入り組んだ路地しかなかったが、現在は街区を囲む形で道路や護岸が造られている。高波などの災害を減らしたり海と街並みの両方を眺めながら歩いたりするのは良い反面、人びとの日常空間と海のあいだは物理的に、そしておそらく心理的にも遠くなっているといえる。

## 拡大する街区

クアイティー王国時代以降も町の拡大は続い

た。二〇〇〇年代には宮殿の西側に天然のワディー（ワディ）（ワディ）を利用する形で入江が開発され、市民の憩いの場となっている。入江の西側はシャルジュというあらたな商業地区で、青果店、雑貨屋、食堂、ホテルなどが並び、活況を呈している。またそこから北側に、さらに郊外に向かって市街地が拡大している。

港町・漁村として出発したムカッラーは二〇一〇年代の変化のなかで新興都市へと変貌を遂げた。現在ムカッラーを目指す人びとは幹線道路や飛行機を利用している。市街地の拡大と埋め立てが進むことで、かつての港町としての雰囲気も薄くなっている。埋め立てられた場所に整備された公園に、インド洋のシンボルであったダウ船が陸に上げられる形で展示されているのが現在の状況をよく物語っている。



ムカッラー旧市街(2001年)



ムカッラーの目抜き通り。白い壁の建物が並んでいる(2006年)



クアイティー王国スルターン宮殿。現在は同名の博物館になっている(2006年)



シャルジュ地区(2007年)



護岸の先にムカッラー市街が見える(2007年)

# 新旧征服地の違いから ゴアの独自性を見る

松川 恭子

甲南大学教授

かつて「黄金のゴア」とよばれたインド・ゴア州は、ポルトガルが海外に勢力を拡大するなかで、カトリックのアジアへの宣教の拠点となった場所である。アフォンソ・デ・アルブケルケ率いる軍による一五一〇年のゴア島（現ティスワディ郡）占領後、フランシスコ会やイエズス会が宣教活動を始め、現地の人びとを強制的にキリスト教に改宗させることもあったと伝えられている。ポルトガル副王が派遣されたオールド・ゴアの中心部には現在も司教座聖堂が壮麗な姿を誇っている。その向かいにはボン・ジェズス教会が建てられており、聖フランシスコ・ザビエルの聖遺体が安置されている。ゴア州の州都パナジー市を訪れば、市街地中央部にある「無原罪の御宿り聖母教会」に目を奪われるだろう。ポルトガルが残したキリスト教の遺産により、ゴアは「インドのなかの西洋」とみなされている。しかし、一六世紀のあいだにポルトガル支配下に入った「旧征服地」から一八世紀になってポルトガル支配がおよんだ「新征服地」に一歩足を踏み入れると、インドの他地域と同様にヒンドゥー教の世界が広がっている。

## 強制改宗の波紋

例えば、オールド・ゴアから二〇分ほど車を走らせると、新征服地に入り、ヒンドゥー教の寺院の姿が目立つようになる。旧征服地でキリスト教への強制改宗が起こった際に多くのヒンドゥー寺院が破壊されたといわれている。ヒンドゥー教徒たちはポルトガルの手のおよばない新征服地に神像とともに逃げ、あらたな地に寺院は移設さ



無原罪の御宿り聖母教会（パナジー市、2005年）

れることになった。例えばシヴァ神を祀るシュリー・マンゲシー寺院は、元々旧征服地のサルセテ郡コルタリム村にあったが、ポルトガルの侵攻により一五六〇年に現在の地に移された。

ゴアのヒンドゥー寺院は村の中心地に位置し、村の創設者一族のマハージャンが維持管理の任を担っている。ヒンドゥー寺院が祀る神は村の守護神であり、マハージャンは寺院だけでなく村の守護者でもある。じつはヒンドゥー寺院が破壊され、旧征服地に教会が建てられた後もマハージャンの役割は変わらなかった。彼らは改宗してキリスト教徒となり、ガウンカール（村の人）とよばれる

ようになるとともに、ヒンドゥーの守護神はカトリックの守護聖人に取って代わられた。

## 隣り合う文化

以上の説明だと、旧征服地のキリスト教（ポルトガル支配）とそれに対抗する新征服地のヒンドゥー教（現地勢力）の棲みわけがなされているように見えるが、旧征服



村の収穫祭でカトリックの聖人像とともに行進する人びと。聖人像を担いでいる人びとはこの村のガウンカールである（メルセス村、2005年）



パンボリム村のザゴールの様子（2001年）



祭礼日のシュリー・マンゲシー寺院（プリオル村、2001年）

地、新征服地の双方でキリスト教徒とヒンドゥー教徒は隣り合って暮らし、人びとの意識および生活レベルで、両者の交わりがゴア独自の形となつてあらわれている。旧征服地のマプサ市にある「奇跡の聖母教会」に祀られる聖母は、元々ヒンドゥー教の女神であり、七人姉妹のうちの一人であったのが、ポルトガルによりキリスト教に改宗させられたと考えられている。教会の祭日にはキリスト教徒とヒンドゥー教徒の両方が参拝に訪れる。ヒンドゥー教徒たちは、彼らの神像におこなうように女神像に油を注ぐ。さらに、両者の交わりの事例として、いくつかのゴアの村々でおこなわれる儀礼のザゴールを挙げることができる。これは、ヒンドゥー教徒とキリスト教徒が一緒になつて村の守護神と守護聖人に捧げるものであり、ダンスと寸劇が夜どおし演じられる。寸

劇のなかの登場人物の一人は白人の王であり、これはポルトガル植民地支配に対する風刺であると考えられる。

ポルトガル支配の影響は、他にも食や建築に見られ、それらはキリスト教徒、ヒンドゥー教徒を問わず、受け継ぐべきゴア独自の文化にとらえられている。一九六一年一月にインド軍がゴアに侵攻し、ポルトガルからの「解放」がなされた後、ゴアを隣州マハラシュトラ州に編入する話が起ったが、人びとはゴアの独自性を守るために反対し続け、ゴアは一九八七年に連邦直轄地から独立した州となった。このように新旧征服地の両方を見ることで、ゴアにおけるポルトガル支配の歴史とそれが現在におよぼす影響をより深く理解することができる。

# モザンビーク島の今昔、バイロから語る

松井 梓

環インド洋地域研究国立民族学博物館拠点特任助教

バイロの朝は早い。五時ごろに目覚め、マットレスの上で微睡んでいると、そのうち近所から箒の音が聞こえてくる。網戸にして開け放った小さな窓、朽ちて崩れた漆喰の壁の隙間、陽の光が差し込むほどに穴の空いたヤシの葉葺きの屋根のあいだから次第第に聞こえてくる、声や足音、生活の音。バイロの人びとが目覚め、動き出したことを感じ取る。そろそろ起きなければ、水汲み場が混み始めてしまう。わたしは起き上がった、夜のあいだに屋根から落ちて積もった、朽ちたヤシの葉の小さな黒いくずを払ってビーチサンダルを履く。床を見ると、ひび割れたコンクリートの隙間から床下の砂とともにあらわれた大量のシロアリが、床に置いた段ボールをむしゃむしゃと食べている。とりあえず見て見ぬふりをする。土間に出てバケツを四つ掴み、裏手に住む女性たちにあいさつをしながら、細い路地を水汲み場へ向かう。

モザンビーク島は  
アフリカ南東部、イ



滞在先の住居(2020年)

な住居が並ぶ、整然とした空間だった。スワヒリ、ポルトガル、インドの建築様式が混濁し、壁はカラフルに塗られ、「華やかで優雅」であると行政官に形容されるほどだったのだ。

そこにはこんな背景がある。当時のポルトガル首相サラザール(在任期間一九三二〜一九六八年)によるファシスト体制下、海洋帝国ポルトガル誕生の地として島は重要性を増し、景観の美化やインフラの整備が進められた。それはシダーデにとどまらず、バイロにもおよび、同じポルトガル領のブラジルで起こった人種や文化の混濁を、熱帯地域に適した人種や文化を生むものとして

インド洋沿岸の、ポルトガル植民地期には首都も置かれた港町だ。南北に約三キロメートル、東西に五〇メートルほどの小さな島だが、景観は北と南ではつきり二分される。北側はシダーデとよばれる旧市街で、植民地期の行政庁舎や住居、商館などのポルトガル様式の建築が残り、巨大な白亜の病院やカラフルな街並みは植民地期の栄華を物語る。対して、バイロとは島の南側の通称で、その日暮らしを営む人びとの地区だ。一八六〇年代の形成当初は、解放奴隷などの「原住民」とされた人びとの居住区だった。現在島の人口は約一万二〇〇〇人におよぶが、うち約一万人が、面積では島の三分の一ほどしかないバイロに住む。わたしは二〇一七年からバイロの家に間借りして調査をしてきた。

## 統治のなかで価値づけられた「現地の伝統」

冒頭で描いたように、バイロの景観はシダーデのように華やかではない。住居は朽ちて雑然とし、家並みに統一感がなく、灰色や茶色あるいは剥げたペンキの暗い色に覆われている。だがそれは、植民地期、特に一九五〇〜六〇年代には異なる質感をもっていた。漆喰できちんと塗られた壁と美しいヤシの葉葺きの屋根をもつ均質的で小さ

称揚するルゾ・トロピカリズモの思想の影響もあり、ポルトガル、インド、アラブのみならず、スワヒリ、アフリカのバンツウの人びとと文化が混濁したバイロは、植民地行政にとって重視すべき場所となったのだ。その後、独立を経て一九九一年に世界文化遺産に登録された際も、建築様式に「現地の伝統」が織り込まれている点が評価され、バイロも含めた島全体が世界遺産となった。

## バイロが高める島の「価値」

シダーデとバイロは、たしかに明確に二分され、まったく異なる景観をもつ。こんにち、観光客が



滞在先住居の土間。開け放った勝手口から近所の女性たちが声をかけて入ってくる(2018年)



シダーデの通り。植民地期の家屋を修復し、ペンキを塗り直して用いている(2020年)



バイロの家並み(2018年)



1969年当時のバイロの家並み(撮影:カルロス・アルベルト・ヴィエイラ)  
出典:Pires-Teixeira, Paulo, *Ilha de Moçambique na Alma dos Poetas: Poesia História Fotografia*(Texto Editores, 2011)

向かうのはもっぱらその歴史が目に見えてわかるポルトガル風のシダーデで、スラムのようにも見える普通の人びとの居住区であるバイロは、多くの人びとがわきの舗装道路からとり過ぎていく。だが、特に一九五〇年代以降、島の歴史的価値への注目は、常にバイロの歴史や「現地の伝統」の価値づけとともに高まってきたのである。

そして今や、バイロは外から価値づけられるだけではない。植民地期に「原住民」の統治と管理のために作られた空間は、人びとが主体的に生き生きと生活を営む空間となった。バイロこそ「現地の人びと」の現実の濃密な生活世界があるのだ。冒頭の、色褪せた空間と織り合わさって生まれる人びとの営みこそが、バイロの価値や歴史を今後も紡いでいくのである。

みんなくくの日本の文化展示場には、日本の山村の暮らしが取りあげられている。焼畑の映像、採集された山菜やキノコ、狩猟や養蜂の用具が並び、現代の山村の暮らしが、それらを組み合わせ成り立っていることを教えてくれる。

わたしは、一九六〇年ごろまで焼畑がおこなわれていた静岡県井川地域の一集落に通い、焼畑経験者から自給的な農耕を学んでいる。その師匠ともいえるまつ子さん（仮名）の畑の「勝手に生えた」作物の話を書こう。

### まつ子さんと畑

まつ子さんは、昭和ヒトケタ生まれ。大家族の長女で、弟や妹の世話で手一杯な母に代わって、お婆さんとともに自給畑を任されていた。一四歳のときには、父に焼畑のイノシシ除けを言い付かり、山の小屋に一人で泊まったこともある。まつ子さんは、「そのころは、今と違って動物はそんなにいなかったし、他の小屋の明かりも見えなし、怖くはなかったねえ。でも心配したうちのお婆さんが、知らないうちに横で寝ていて、それはびつくりした！」と笑う。

幼いころから山と暮らしてきたまつ子さんは、現在も、親族の農作業支援を受けながら、山裾でお茶やシイタケを栽培し、自給用の畑も三カ所所で続けている。

山の斜面に広がる茶畑の頂上に、まつ子さんの畑のひとつがある。茶畑は四、五反（二生えた）と言う。しかし、何度か畑に通うあいだに、これらの作物は、根やこぼれ種子などが地中に残り、自生したものだとわかった。作物残渣を緑肥にすることも一因だ。こぼれ種子の自生は、自給畑ではよくあることだが、まつ子さんの畑は、その数がとても多い。



茶畑のなかのまつ子さんの自給畑。獣害ネットで獣の侵入を防いでいる（静岡市、2022年）

このように「勝手に生えた」作物を利用する理由は、「好きなどころで好きなききに勝手に生えたものは良く育つ」からだ。畑のなかでも勢いが良く、丈夫に生長するまつ子さんのお婆さんは、畑で採れたダイコンなどの種子を、播種期に限らず、家近くの茶畑のなかにバラまいていたそうだ。発芽のタイミングを作物自身に委ね、「勝手に生えた」ものを利用したのだ。

### 「なぶて」に食べる

また、焼畑がおこなわれていた当時の茶畑には、コンニャクやシソ、フキ、ミョウガ、地カブ、カキナなどが勝手に生えていた。まつ子さんのお婆さんは、両手



まつ子さんの茶畑の茶摘み（静岡市、2021年）



地カブの胡麻和え（静岡市、2022年）



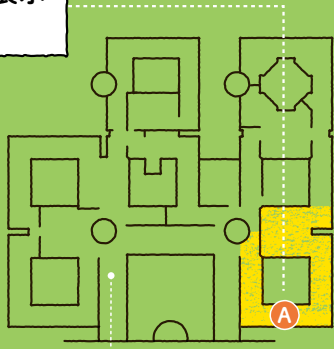
A 蜂蜜採取用 巣箱（長崎県、H0024620）



A シイタケのほた木（奈良県）

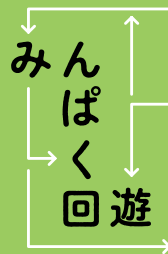


A 背負い籠（岐阜県、H0034221）



観覧券売場  
本館展示場

### 日本の文化展示 「日々の暮らし」



## 山村の畑に

## 勝手に生えた作物

川上香

総合研究大学院大学博士後期課程



川沿いの畑の「勝手に生えた」地カブの菜花（左）。地カブは、おもに葉を利用する。黄色い花は養蜂者にとって春の蜜源となる（静岡市、2021年）

### 「こぼれ種子」の利用

まつ子さんの畑では、一年をとおして約五〇種類の作物が作られている。「孫はネギが大好きだから」といった、家族の好みに沿った野菜が栽培される。街で暮らす子や孫、弟たちが作業の手伝いに来たときの土産にもする。

一方で、畑のあちこちに、シソ、アズキ、地キユウリ、ミニトマト、コンニャク、フキ、ジャガイモ、半野生的な地カブや、カキナなどが「生えている」。ネギのなかにアズキがいたり、カボチャのなかにミニトマトがいたりする。野菜の種類別に区画を決めて、栽培されているものの、夏野菜の季節には、畑全体から作物が湧いているかのようだ。

まつ子さんは、これらの作物を「勝手に生えた」お婆さんは、なぶてに食べる、と言った。存分に惜しみなく食べるってことかなあ」と、まつ子さんは言う。「勝手に生えた」作物は、穀類のように主食とはならない。しかし、家族の食事を日々作る者にとっては、副菜を存分に作れる「たすかる」作物なのだ。まつ子さんのお婆さんは、「勝手に生えた」作物を茶畑にいつも持っていた。

現在の茶畑では、勝手に生えた作物をシカやイノシシが食べ尽くす。まつ子さんは、食いちぎられた地カブを指して「シカの領収書だ」と、おどけて言う。今では獣害ネットを張った畑に、茶畑から山菜のフキを移植し、地カブやカキナを種子になるまで置いて、こぼれ種子から勝手に生えるようにしている。まつ子さんは、「今はおいしい野菜がいっぱいあるけど、このひとたちも捨てたもんじゃないんだよ」と言う。寒さに強い地カブやカキナは、畑に野菜が少ない冬から春先に利用できる、今も変わらず貴重な青菜だ。まつ子さんは、畑のなかに勝手に生える作物を増やし、「なぶて」に使う、家族の腹を満たしている。

獣害が激化した山村では、山菜や「勝手に生えた」作物が畑のなかで見られるようになった。畑では多様な植物と作物を組み合わせた自給的な農耕が続いているのである。

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

# みんなく インフォメーション

## 重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

## イベント予約はこちら

みんなくホームページ  
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



### 特別展

## 「ラテンアメリカの民衆芸術」

会期 5月30日(火)まで  
会場 特別展示館



レタプロ(サボテンの実)／ペルー共和国  
(撮影：六田知弘、六田春彦)

◆関連イベント  
みんなく映画会  
第54回みんなくワールドシネマ  
「ラ・ヨローナ 彷徨う女」  
日時 5月27日(土)13時30分、  
15時55分(13時開場)  
会場 みんなくインテリジェントホール  
(講堂)(定員350名)

解説 鈴木紀(本館教授)  
司会 菅瀬晶子(本館准教授)

※事前申込制(本人を含む2名まで、  
先着順、参加無料(要展示観覧券))  
※事前申込の方へ入場整理券を当日  
11時から本館2階会場前にて配布  
します。

※受付期間中に定員に満たない場合  
のみ当日参加を受け付けます。

### 【申込期間】

■一般受付 5月19日(金)まで  
※友の会先行受付は終了しました。

### イベント

## 「音楽の祭日2023 in みんなく」

プロ・アマを問わずにみんなく音楽を  
楽しむイベントです。フランスで  
1982年にはじまった「音楽の祭典」  
になり、日本では2002年に関西  
からスタートしました。「音楽は全て  
の人のもの」という精神にのっとり、1  
年のうちで昼が一番長い夏至の前後の  
日に開催されます。



2022年開催の様子

企画課 「音楽の祭日」担当  
ongaku@minpaku.ac.jp

日時 6月11日(日)1部10時30分、  
2部13時50分(10時開場)  
会場 みんなくインテリジェントホール  
(講堂)(各部定員400名)  
【申込期間】  
5月11日(木)～6月5日(月)  
主催 国立民族学博物館  
主管 音楽の祭日 Fête de la Musi-  
que au Japon 日本事務局  
※事前申込制(本人を含む2名まで、  
定員に達し次第受付終了)、先着順、  
参加無料(要展示観覧券)  
※予約は各部ごとに受付。  
※事前申込の方へ入場整理券を当日  
各部開演30分前から本館2階会場  
前にて配布します。  
※当日参加を受け付けます(定員  
100名)。  
【お問い合わせ先】

## みんなくミュージアムハートナース (MMP)のワークショップ

あそびの広場2023「オセアニアの  
海と風を感じる1日」体験プログラム  
「絵本でオセアニアの  
文化に触れよう」  
日時 5月5日(金)11時30分～12時、  
15時～15時30分(10時受付)  
会場 本館1階エントランスホール  
(合同定員14名)  
対象 年齢制限なし(未就学児は保護  
者同伴)

## 訃報 藤井知昭名誉教授

本館の藤井知昭(ちかあき)名誉教授(90歳)がさ  
る3月24日に逝去されました。民族  
音楽学・音楽人類学が専門で、民  
博創設の1974年に助教として  
着任された後、アジア地域の資料収集  
に尽力されました。また、「音楽以  
前」「民族音楽の旅―音楽人類学の  
視点から」等の著書のほか、「音と映像  
による世界民族音楽大系」シリーズな  
どの映像集を監修されました。本  
館を1996年に退官後は、中部大  
学を経て、2011年から2年間、ア  
ジア太平洋無形文化遺産研究センタ  
ーの初代所長を務められました。これら  
の功績により、多数の賞を受賞され  
ました。2014年には瑞宝中綬章を受章さ  
れました。謹んでお悔やみ申し上げま  
す。

## 訃報 寺田吉孝名誉教授

本館の寺田吉孝(きちか)名誉教授(88歳)がさ  
る3月29日に逝去されました。民族  
音楽学、インド研究が専門で、本館  
には1996年に助手として着任され  
ました。「音楽からインド社会を知る  
―弟子と調査者のほさま」等の著作  
があるほか、「アリアン峠を越えていく  
―在日コリアンの音楽―等多くの映像  
作品を制作され、これらはビデオテー  
クなどでご覧いただくことができます。  
2019年には企画展「旅する楽器  
―南アジア、弦の響き―」を担当され  
ました。また、2022年度まで特  
別研究によるプロジェクト「パフォーミン  
グ・ネット」と積極的共生の共同代表を  
務められるなど、本館の研究において  
現役でご活躍でした。謹んでお悔やみ  
申し上げます。

## みんなくウィークエンド・ サロン ― 研究者と話そう

本館の研究者が「みんなく」の展示資料「調  
査している地域(国)の最新情報」「現在取り  
組んでいる研究」についてわかりやすくお話  
します。  
会場 本館展示場(ナビひろば)  
※定員なし(ご自由に参加いただけます)  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

5月14日(日)14時30分～15時

## アマゾンの聖人祭 ― 在来の伝統とキリスト教の融合

話者 齋藤晃(本館 教授)

第534回  
6月17日(土)13時30分～15時(13時開場)

## 日本人による 最初期のガラパゴス探検

講師 丹羽典生(本館 教授)

日本人として最初期に探検隊のメンバーとし  
てガラパゴス諸島に足を踏み入れた人物に  
朝枝利男がいます。本ゼミナールでは、彼  
がガラパゴスにて見聞したこととその成果を  
紹介します。

### 【申込期間】

■友の会先行予約

5月15日(月)～19日(金)(定員80名)

### 【申込先】

国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付 5月22日(月)～6月14日(水)

## みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)  
※定員400名  
※事前申込制(先着順)、参加無料  
※当日参加受付あり(定員80名)

第533回  
5月20日(土)13時30分～15時(13時開場)

## データベースから デジタルミュージアムへ ―文化遺産オンラインのリニューアル 公開とタイムマシンナビ

講師 丸川雄三(本館 准教授)

### 【申込期間】

■一般受付 5月17日(水)まで

※友の会先行受付は終了しました。

お問い  
合わせ

## 国立民族学博物館 広報・IR係

電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401

お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



## 友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付  
フォームをご利用ください。

## 友の会講演会

参加形式  
①本館第5セミナー室(定員90名)  
②オンライン  
友の会会員:無料  
一般(会場参加のみ):500円  
※事前申込制(先着順)  
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第536回 5月6日(土)13時30分～15時

## 【特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」関連】 ラテンアメリカの民衆芸術 ―キュレーションの挑戦

講師 鈴木紀(本館 教授)

第537回 6月3日(土)13時30分～15時  
文化のなかでまもられるキツネザル  
―マダガスカルにおける霊長類と  
人との関係

講師 市野進一郎(本館 特任助教)

マダガスカルはアフリカ大陸南東のインド洋  
上にある巨大な島です。そこに生息する霊  
長類は約100種。すべてがマダガスカル固  
有種です。森林の消失が著しいマダガスカル  
における霊長類の保全には、地域住民の  
暮らしを理解することが必要とされています。  
講演では、南部の例を中心に、人びとが霊  
長類とどのようなかわりをもって暮らしてき  
たか紹介します。

## 東京講演会

友の会会員:無料、一般:500円

※事前申込制(先着順、定員50名)

※オンライン配信はありません。

第134回 6月24日(土)13時30分～15時  
人はなぜ共に歌うのか?  
―インド山岳民族ナガの  
伝統ポリフォニーと共生社会

講師 岡田恵美(本館 准教授)  
会場 モンベル御徒町店4階サロン  
(東京都台東区上野3-22-6  
コムテラス御徒町)

学校をはじめとした式典において合唱は欠か  
せません。しかし社会人になると、集団で合  
唱する機会が減った方も多いのではないで  
しょうか。インド北東部・山岳民族ナガの農  
村社会では、人が集まると自然と合唱が始ま  
ります。棚田での田植え、収穫、さまざまな  
場面でも重なりあった声が響き、相互扶助  
の精神が歌のなかに息づいています。人はな  
ぜ共に歌うのでしょうか。この根源的な問い  
を考えます。

## 巡回展

## 「驚異と怪異 ―想像界の生きものたち」

会期 5月14日(日)まで  
会場 福岡市博物館 特別展示室  
「ユニバーサル・ミュージアム  
―さわる! 触! の大博覧会」  
岡山巡回展2023  
会期 5月7日(日)まで  
会場 KURUNHAL(クルン  
ホール)・KURUNHAL(クルン  
ホール)・KURUNHAL(クルン  
ホール) (岡山市北区下石井2-10-12)

過去の「月刊みんなく」をPDFで開  
覧できる「月刊みんなくアーカイブ  
」のサイトを公開しました。現在  
本サイトでは、2005年4月号、  
2022年12月号を掲載しています。  
■特設サイト  
[https://www.minpaku.ac.jp/gekkan\\_minpaku/index.html](https://www.minpaku.ac.jp/gekkan_minpaku/index.html)



専門は日本民俗学・民俗芸能研究で、  
フィールドワークと歴史資料の調査に  
基づき、神楽などの芸能を担う宗教  
的職能者の活動や伝承組織の歴史的  
変遷を研究。  
河西 瑛里子 助教  
(学術資源研究開発センター)  
京都大学大学院  
で博士号取得。  
民博外来研究員  
大阪府療養大学  
国際ファッション  
専門学校を経て  
専門職大学を  
卒業。イギリスの  
グラストンペリー  
を中心に、聖地  
観光やヘイカ  
ラムキリスト教  
到来以前のヨ  
ロッパの信仰  
に基づく創造  
的な宗教実践  
を研究。



お問い  
合わせ

## 国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/) E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp





# 受け入れてもらえない供物 ——遺跡でパガプをおこなう

松本 雄一  
まつもと ゆういち  
民博人類文明誌研究部



## パガプという儀式

発掘調査を始める前はいつでも不安でいっぱいである。病気やけがなどをせずに無事に調査を終えることができるか、治安の問題は大丈夫なのか、そして何

より、果たして十分な成果が上がるのか。二〇〇七年一月、ペルー中央高地アヤクチョ州、標高三五〇〇メートルに位置するビルカスワマンの町で、わたしは不安に押しつぶされかけていた。あてにしていた研究費のひとつはとれず、予

定よりもはるかに乏しい研究費で何とか博士論文を書くためのデータを手に入れなければならなかったのだ。

そんななかで、「まずはパガプをおこなわねばならない」と現地出身のペルー人共同研究者が強く主張したのである。パガプとは現代のアンデスにおいて広く見られる儀式のひとつで、大地の神や聖なる山の精霊に対してささげものをおこなうことで動物の繁殖、旅や土木工事の無事、家庭や共同体の繁栄などさまざまなことを祈願するものである。調査中の無事を祈って参加者全員でパガプをおこなうこととなったが、わたしにとって渡りに船であった。本当にいろいろ祈りたくて仕方なかったのだ……。

## 供物の準備

ところが話は簡単ではなかった。ま



上:全員がたばこを吸い、コカの葉を噛む(2007年)  
下:コカの葉はパガプに欠かせない(2013年)

来はリヤマの胎児をささげる必要があるが、その代用であるとのこと。用意したコカの葉はもつとフレッシュなものでなければいけないと言われ、町中の店を訪ね歩いた。さらなる問題は果物であった。当時は州都とビルカスワマンを結ぶ道は舗装されておらず、果物や野菜の入荷はいつも確実とはいえなかった。たしか、リングカウリが足りなかったと記憶している。次の入荷を待つとすれば大きな時間のロスになりかねない。何とか今あるものを供物にできな

いかと相談し、遺跡の裏にある小さな洞窟でパガプをおこなうことを了承してもらった。供物を供えて、参加者全員がたばこを吸い、コカの葉を噛む。呪術師が祈りをささげているが、その表情は険しい。ややあつたため息とともに、アプが供物を受け入れなかったと伝えられる。混乱するわたしに、呪術師は供物の問題点をひとつひとつ指摘した。この地のアプは夫婦であるから供物はすべて男女一対でなければならぬこと、指定さ

れたものは欠けてはならないこと、そしてたばこは輸入ではなく国産のものでなくてはならないこと。参加者全員の前でこのような話を聞かされたわたしは、シヨックですっかりしょげかえってしまった。

## 何とか成功

ここで頼りになったのが、ペルー人共同研究者と地元考古学専攻の学生たちであった。知り合いの家を当たって足りなかった果物とたばこを調達してく



受け入れてもらったパガプの供物(2007年)

日コカの葉を噛んだ。いろいろ大変な思いもしたが、終わってみると参加者全員が無事で十分な成果を上げることができていた。

それ以来、毎回調査前にはパガプをおこなうことにしている。しかし、昨年の調査ではパガプをおこなうことができなかった。コロナ禍のさなかに、密に人が集まる行為を避けねばならなかったのだ。今回は、調査の無事のお願いとともにお詫も念じなければと思っている。



コカの葉を参加者に配る呪術師(2013年)

「アプが供物を受け入れると言っている」ということばに心からほっとしたことを覚えていた。続く「良い結果が出るだろう」「ただし、あなたは調査中毎日コカの葉を噛みなさい」とのことばに従い、口のなか



聖なる山アティンホチャ(2022年)

山の精霊に祈ってみました



6年おきに開催されるポカラのバイラヴ仮面舞踊 (ポカラ、2016年)



左:バイラヴ寺院から舞踊の場まで12神が行進(ポカラ、2023年)  
右:1958年の写真に写る自分を指さすバイラヴ仮面舞踊の司祭ジャガト・パハードゥル・タムラカル氏(ポカラ、2016年)

左:バイラヴ寺院から舞踊の場まで12神が行進(ポカラ、2023年)  
右:1958年の写真に写る自分を指さすバイラヴ仮面舞踊の司祭ジャガト・パハードゥル・タムラカル氏(ポカラ、2016年)

左:バイラヴ寺院から舞踊の場まで12神が行進(ポカラ、2023年)  
右:1958年の写真に写る自分を指さすバイラヴ仮面舞踊の司祭ジャガト・パハードゥル・タムラカル氏(ポカラ、2016年)

はポカラのバイラヴ舞踊をとらえた現存する最古の写真で、「祖父が亡くなって三〇年になるが、今にも話し出しそうな素晴らしい一枚だ。高山氏に心から敬意を表したい」という。当事者集団からの初の照会に高山氏も喜ばれ、民博はバイラヴ舞踊保存会に一八枚の写真を正式に提供した。

この過程で二〇二六年一月にバイラヴ舞踊が催されることを知ったわたしと寺田吉孝氏(民博名誉教授)は、別の映像取材の日程をバイラヴ舞踊の初日に合わせて、その映像も撮ることにした。サビン氏や保存会の全面的な協力の元、撮影は順調に進み、館内にて公開中の民族誌映

画「バイラヴ仮面舞踊」ができた。さらに二〇二三年、今度は特別展「交感する神と人——ヒンドゥー神像の世界」のために、バイラヴの仮面と衣装や装具を収集することにした。民博にはネパールの仮面が数多くあるが、どれも仮面だけで、銀製の宝冠やヤクの尻尾で作った髪、人が被るための緩衝材などは付いておらず、衣装は皆無だったからだ。

### 過去の写真のあらたな価値

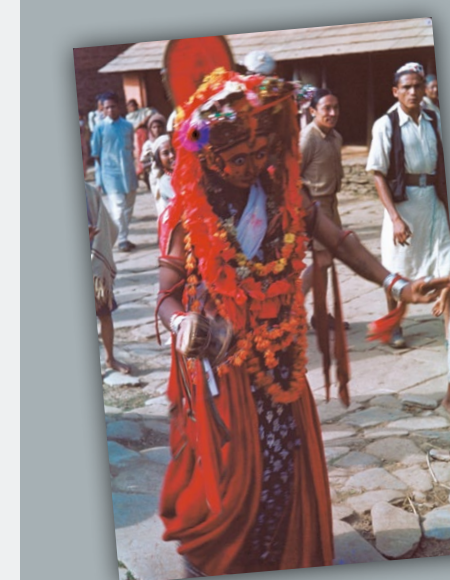
サビン氏の照会からしばらくして、今度はポカラの古写真を収集し写真展を開催してきたスニール・ウラク氏から高山氏が撮影した写真を展示したいとのメールが届いた。彼は写真家であった父を称え、ジャガンナート・ウラク記念財団を作り活動するが、写真展のたびに使用許諾を申請するようになり、民博もそれに応じてきた。二〇一八年には、ついにポカラの旧市街に「ポカラ・アーカイブ写真ギャラリー」が常設され、民博は同財団に八〇枚の写真を提供した。一枚の写真から広がったつながりは、過去の写真が当事者集団や地元の人びとが使いやすいかたちで活用され、あらたな価値

# 一枚の写真から 広がる協働

みなみ まきと  
南 真木人 民博 超域フィールド科学研究部



ポカラ・アーカイブ写真ギャラリーにてスニール・ウラク氏(ポカラ、2018年)



サビン氏の祖父が写る一枚の写真(撮影:高山龍三、ポカラ、1958年、X0213995)

### ネパール写真データベース

資料点数: 3,879点  
1958年の西北ネパール学術探検隊に参加した京都文教大学元教授、高山龍三氏と隊員(内、約490点)が撮影した写真3,584点、および同隊がドルパで収集し、民博に収蔵されている標本資料の写真295点(高山氏撮影)からなるデータベース。2007年から日本語版と英語版で公開中。  
<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/nepal/>



一九五八年、日本の海外学術共同調査の嚆矢といえる調査隊が開国間もないネパールを訪ねた。KJ法やパーテイー学でも著名な民族学者、川喜田二郎氏を隊長とする西北ネパール学術探検隊である。彼らは同年六月から二月まで、チベット国境に近いドルパ郡で調査をおこない、多くの論文を発表し日本の民族学の黎明期を築いた。そればかりか川喜田氏らは、記録映画「秘境ヒマラヤ」(読売映画社松竹配給、一九六〇年)や「鳥

葬の国——秘境ヒマラヤ探検記」(光文社、一九六〇年)などの書籍を発表し、まだ海外旅行が高嶺の花だった日本人に夢と憧憬をもたらした。ネパール写真データベースは、この隊の隊員であった地理学者、高山龍三氏が撮影した写真の寄贈をうけて作られたものである。二〇〇七年の公開から閲覧に供され、出版物への掲載申請も何度となくあったが、被写体となったネパールの人びとやその関係者からの声が届くことは

久しくなかった。一枚の写真から  
二〇二五年、このデータベースを見たポカラ市在住のサビン・ウダース氏からメールが届いた。ポカラで撮影されたバイラヴ舞踊の写真のなかに、クマリの面を着けた祖父が写っている。他にも写真があれば欲しい。わたしたちは六年おきにこの舞踊を続けている」というものだ。高山氏の写真

# 近代の視点

諸昭喜 チネソウキ 民博グローバル現象研究部

監督ハンフリー・レインズの視点

西洋医学の薬で治療しているイ・イルソン  
医師(映画「島の医者」より)  
Humphrey W. Leynse Films and Papers;  
Manuscripts, Archives, and Special  
Collections; Washington State University  
Libraries.

## 「島の医者」

原題: Island Doctor  
1965年/アメリカ/英語、韓国語/28分/YouTubeから視聴可能  
監督: ハンフリー・レインズ、チャンサンミヤン  
出演: イ・イルソン、ヤンホージンほか



現在の鬱陵島道洞(トドン)港。火山島のため海岸のほとんどが絶壁である  
(撮影:ソン・デウォン、韓国、2023年)



上:ソナンダンで祈っている女性  
中:1960年代の道洞港。手前はイカ干し場。当時、イカ漁が盛んであった  
下:アメリカからの小麦粉とトウモロコシを配給されている住民(映画「島の医者」より)



### 舞台となった六〇年代半ばの鬱陵島

映画「島の医者」は、三〇分に満たない短編作品だが韓国の離島における一九六〇年代半ばの様子を描いた非常に貴重な資料である。

鬱陵島は、韓国本土からもっとも遠い島で、比較的近代化が遅れていた。現在は東海岸沿いの浦項市からフェリーで三時間で行くことができるが、一九六〇年代当時は、椅子もない木船に揺られ、夕方に出発して平均一時間以上海を渡り、朝になってようやく島に到着するという状況だった。研究者が二〇〇七年に滞在した際には、島内には食料品店や食堂が少なく、交通手段も充実していなかった。そのうえ、急な斜面の山の上に村が点在しており、道路の整備や水道・電気の普及が難しかったことから、この映画の背景となる一九六〇年代中盤の島民の生活は、外部の人たちにとっては時代に取り残されたかのように見えたかもしれない。

いる。主人公が住民に対してもつ支配的な感情は「憐憫」である。

### 近代化に尽力した医師イ・イルソン

映画の主人公を演じるのは俳優ではなく、「韓国のシュヴァイツァー」とよばれるイ・イルソン(李一善)という実在の医師である。彼はソウル大学の医科大学を卒業し、アフリカ中部のガボンにてシュヴァイツァーの医療宣教に参加した。韓国に帰国した後、一九六一年から見知らぬ鬱陵島に妻とともに暮らし、鬱陵島の近代化のためにさまざまな活動を始めた。当時、島の環境があまりにも劣悪で、島を捨てて本土の土地を買って移住する計画まであった時期に、彼は教会と病院を建てて人びとを救済した。そのため、近代医療史だけでなく、キリスト教の分野でも語られることの多い人物である。

この映画はイ・イルソン医師による島の近代化のための努力がメインストーリーとなっている。しかし、監督のレインズとイ・イルソン医師の視点は、映画を製作した米国文化情報局の視点と結びついており、「前近代的」な社会に対する西洋人の視点が如実にあらわれている。未開の哀れな韓国人を救い、援助しなければならぬ

ハンフリー・レインズはアメリカの軍人であり、映画監督、大学教授など多様な経歴をもつ人物である。一九五七年から一九六六年まで米国文化情報局(USIS)に勤務し、韓国に駐在していた。当時、彼は韓国に関する映画とドキュメンタリーを制作し、特に一九六〇年代の鬱陵島民の生活を鮮やかに描いた。彼は「島の医者」を作った後、米国文化情報局を辞め、家族とともに一九六六年から六九年まで約三年間、鬱陵島に住みながら六七分の映画「Out There, A Lone Island」を制作した。文化情報局に所属していたときとは異なった視点で、島民のありのままの生活を静かに描き出している。

では、「島の医者」ではどうだったか。例えば、死んだ子どもの傍らで泣いて悲しむ女性の横で、男性が漢方薬の器を投げて壊してしまう場面があり、そこで「無知と非効率の薬」とナレーションが流れる。また、主人公である医師は、ソナンダン(村の守り神を祀る場所)で祈る女性を眺めながら、多くの島民はアニミズム的な信仰では病気を治せないことを知らないと考え、一九世紀のハワイ、モロカイ島でハンセン病患者たちのケアに生涯を捧げたダミアン神父に自らを投影して

という人類愛的な強い責任感さえ隠すことなく表現する。映画において近代医療の普及過程が、幼い女の子と壮年の漁師という二人の人物を通じて対照的に描かれる。女の子は結核にかかって、きちんと診断を受けられず、治療薬もなく、苦しんでいた。しかし、医師の「同情心の強い」友人たちが送ってくれたレントゲン機器で肺の写真を撮ることができ、アメリカから援助された治療薬で完治し、幸せになる。一方、漁師は捕まえたイカをギャンブルで失い、アルコール中毒でいつも酒を持ち歩き、西洋医学の治療を拒否する。結局、医師の頬を殴って病院から出てしまう。このように、漁師の行動は、新しい医療に対する住民の不信や恐れを反映しているようだ。

映画の最後にイ・イルソン医師は「貧しさを見た。そして同時に、無知と汚れ、怠惰と迷信も見た」と述べ、自分の仕事には人類愛と献身が必要であると語っている。一九六〇年代の鬱陵島の住民は近代の視点から、貧困で非衛生的な生活をして、無知で迷信を信じる未開の人びとのように描かれている側面がある。それにもかかわらず、この映画は鬱陵島の当時の生活や漁業について記録していることから、現在の鬱陵島の住民からも高い評価を得ている。

# 四つ辻

きくや りゅうた  
菊谷 竜太

高野山大学准教授

「ギターが上手くなりたければ真夜中ちょっとまえに十字路にいて、一人でギターを弾くんだ。悪魔がチューニングして、最高に上手く弾けるようになる」

(ロバート・ジョンソン)

道が交差する場所、四つ辻(十字路)とは、古くから時代や地域を超えて神話・伝説的あるいは祭祀的コンテクストにおいて重要な役割を担ってきた。すなわち、四つ辻とは感染症をもたらす悪霊・鬼霊たちが徘徊し、死者と結び付き、呪術的にふさわしいところとされる。その一方で、ひとつとが行き交う交易路という面で、豊穡や繁栄、幸福をもたらす場所でもあった。これは懐妊・不妊治療のための魔術を執りおこなうに最適なポイントとして四つ辻が指定されるのと無関係ではないだろう。「生」と「死」という二つの要素が四つ辻にはそなわっており、それゆえにひとの生死を司る魔術にとって極めて重要な意味をもっていた。例えば、インド・チベットにおいてもっとも流行した密教聖典『秘密集会タントラ』には次のような一節がある。

「①母神の神殿、②屍体置場(墓場)、③空家、④四つ辻(catuspatha)、⑤一本立のリング、あるいは⑥一本立の樹において『調伏(呪殺)法』を彼(密教行者)は始めるべし」

(Guhyasamāja 14. 54)

この記述で注目されるのは、他者の生殺与奪を支配する魔術・「調伏法(abhicara)」に適した

六つの場所のうち、①④⑤に神的存在がもたらす繁栄の要素が付与される点にある。例えば、①は母神信仰を意味するが、これは⑤シヴァ神のリング(性器)信仰と同じく「出産や豊穡」をも意味するものといえよう。なかでも、④四つ辻は仏教徒にとって釈尊の遺体を納める「仏塔」を設置するにふさわしい場所として、ブッダの生きた時代(紀元前五世紀ごろ)から特別な場所とされてきた。

ところで、四つ辻はサンスクリット語で「チャトゥシュパタ(catuspatha)」と言いあらわされるが、これは「四つの道が合わさったところ」、すなわち「四つの道の合流点」を指し、全体として集合の意味をもつ。似たような例としては「三層からなる世界」、すなわち「三界(triloka)」がある。このような数詞+実体詞から作られる「数詞限定複合語」はインド伝統文法学において「ドヴィグ(dvigu)」とよばれ、さきの「集合的意味」のほかに「複合形容詞」として特別な意味をもつ。例えば、「ドヴィグ」とは二つの牛であるが、これは「牛二頭」を指してはおらず、牛二頭と同じ価値をもつもの」という意味になる(P. 2. 1. 52, Speijer § 299)。いずれにせよサンスクリット語にとって四つ辻のイメージは「道が合わさるところ・結節点」を意味し、古代インドの宗教において「神がおやす場所」であったことは注目されて良いだろう。

さて、四つ辻については「辻」が国字(日本由来)であることや英語の“crossroads”が単複同形であるなど、まだまだ興味は尽きないが、それはまたべつのおはなし。

# 『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

## 国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

## 月刊みんぱく 2023年5月号

第47巻第5号通巻第548号 2023年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子  
岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



# 月刊みんぱく

2023年

5月号

## 編集後記

地球上の異なる地域で、景観が似ている街があるのはなぜだろうか。そんな疑問を抱いたのは、初めて外から内を眺めたときだった。わたしが数年暮らしたセネガルの街や市場の風景は、ある種の原風景ともいえるほど馴染み深い「内」なるものになっていた。地中海に面したマグレブ諸国を訪れたときも、同じような市場の景観と商習慣にほっとしたものである。しかし、この相似性に気が付いたのは、長年の海外滞在から日本に戻り、あらためてこのふたつの地域を訪れたときだった。日本とは明らかに違うからこそ、サハラ砂漠で隔たっているアフリカ大陸の異なる地域の相似性に気が付いたのであった。

人は移動する。移動するときはモノを運ぶ。文化を運ぶ。文明を運ぶ。西アフリカとマグレブ地域に共通するのはイスラームという宗教であり、それに付随するものがともに伝播した。

本号の特集で登場するインド洋に面した街々では、英仏蘭による植民地支配という歴史がそうしたものを運び、街のなかにかたちや景観として記憶をとどめているのだろう。

旅をして旧市街に宿をとったとき、次に来るときは新市街に泊まりたいと思ふ。その逆も同じで、どちらも魅力的である。(三島禎子)

2023年4月号特集「酒」の内容に誤りがありました。下記のとおり訂正いたします。

- ・p.5 本文下段1行目  
誤) 産地斜面 正) 山地斜面
- ・p.8 本文中段うしろから6行目  
誤) 一七世紀から一八世紀にかけて 正) 一八世紀から一九世紀にかけて

次号の予告 6月号

## 特集「フィールドワーク×月経

——類人猿・人・フィールドワーカー」(仮)

## 国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

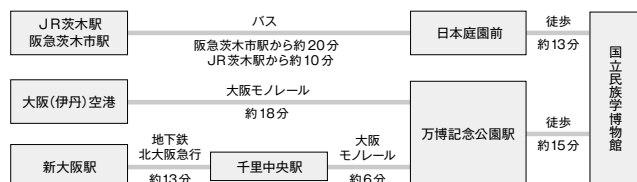
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)  
年末年始(12月28日~1月4日)



### 主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。

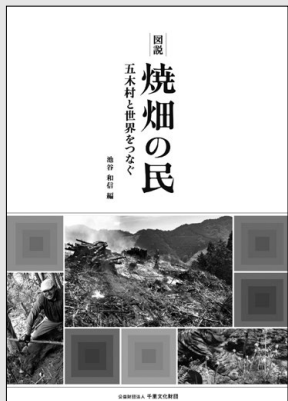


みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館友の会機関誌  
『季刊民族学』から、さらなる知の世界へ



焼畑から現代文明を考える  
森林破壊の原因のひとつとされ、世界的には衰退しつつある焼畑。しかし、焼畑をなりわいとする人びとは、森の自然回復の過程で変わりゆく植生に応じて多様な資源を利用し、自然と豊かな関係を築いている。「焼畑の民」の暮らしから、わたしたちの生き方を見つめなおす一冊。

図説

# 焼畑の民

五木村と世界をつなぐ

池谷和信 編

B5判(四八頁)・オールカラー、八八〇円(税込)  
9781419156061 8514



今、ニホンウナギが危ない  
水辺生態系の指標、ニホンウナギの資源減少は、食と生態系の危機を告げる。干潟文化写真家と民族情報学研究者、あわせて二六〇歳を超えるふたりが、有明海を起点に、フィールドワークと文献調査、二色の糸で織りなす、次世代へのメッセージ。  
「今、私たちに何ができるのか」

# 有明海のウナギは語る

食と生態系の未来

中尾勘悟 著  
久保正敏 編著

発売…河出書房新社  
B5判(二八八頁)・カラー(二五五頁)、二九七〇円(税込)  
9781413009192 25319

公益財団法人 千里文化財団

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1  
(国立民族学博物館内)

TEL 06-6877-8893  
FAX 06-6878-3716

ご購入はこちら

- 国立民族学博物館ミュージアム・ショップ  
email shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
- ミュージアム・ショップ WEB サイト「World Wide Bazaar」  
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

